

肢体不自由特別支援学校（中学部）の自立活動において MWSを活用した事例研究について

コミュニケーションの改善に向けた取り組み

○愛甲悠二

（埼玉県立越谷特別支援学校）

KEY WORDS: コミュニケーション 自立活動（時間における指導） MWS

1、目的

筆者は、埼玉県越谷市にある児童生徒数235名の肢体不自由特別支援学校に勤務をしている。以前は障害者職業カウンセラーとして障害者職業センターに勤務をしており、本校に着任してからは今年度で6年目になる。特別支援学校は、少人数制の学習グループで授業が受けられるという利点がある一方で、筆者としては変化の少ない限定されたコミュニティの中で生活するといった側面もあると感じている。コミュニティが限定されることで、コミュニケーションに課題を抱える児童生徒は、コミュニケーションを改善するための経験が制限されてしまうことにつながりかねない。特に、準ずる教育課程に在籍している児童生徒においては、教科中心のカリキュラムが組まれ、自立活動（時間における指導）の時間が限られており、身体に関わる取り組みが優先的に行われている。

本研究では、中学部準ずる教育課程の自立活動（時間における指導）の中でコミュニケーションを改善させるために行った活動を紹介することで、コミュニケーションに困難を抱える児童生徒にどのようなアセスメントが有効であるかを明らかにすることを主な目的とする。

2、方法

本研究は、中学部に在籍する生徒2名を対象にコミュニケーションを改善する指導を行った。障害者職業総合センターが開発・研究を行う職業評価の一つであるMWS（実務作業）の技法を教育現場に応用することを思い立ち、その中で特に即時的なフィードバックと振り返りを中心に行うことで、コミュニケーションの改善を図った。A（ピッキング）、B（納品書作成）の活動場面におけるインフォーマルな変化をまとめ、分析することで、MWSの自立活動（時間における指導）での有効性について検証した。

3、倫理的配慮

この度の事例発表について、本人とその保護者に対しては発表目的や内容の説明を行い、承諾を得ている。

4、生徒A、Bの実態

Aは、二分脊椎があり、常時車椅子を使用している。明るく社交的であり、興味関心のあることに対して積極的に取り組むことができる一方で、注意のコントロールの難しさがあり、物を落としたり、ぶつかったり、また興味関心のない場面での集中の持続性の難しさがある。

Bは、二分脊椎があり、常時車いすを使用している。手先が器用で、作業遂行面において困難は感じられないが、コミュニケーション面では、本人が信頼し心を許す相手とはスムーズなやり取りができるものの、それ以外の相手とは言葉を介したやり取りが極端に少なくなる傾向がある。

5、結果

◆Aについて

Aが課題としている注意のコントロールの難しさについて、即時的な振り返りの中で、適宜Aと共有するようにした。次に、「注意事項」を短くまとめたカードを作成し、活動を始める時点でAと共有するようにした。本活動を繰り返すうちに、徐々に課題が活動場面でほとんど見られなくなっていく。例えば、課題の一つの要素である集中の持続性についてであるが、活動自体に目的意識が持てるようになり、作業を始めると最後まで集中して取り組むことができるようになった。学校生活の中においても一定の改善が見られたものの、言葉がけや環境調整等が必要な場面が見られるなどの課題が残った。

◆Bについて

Bは、活動場面の中で普段は自分から関わろうとしない相手に対しても、「お願いします」「はい」など日常的に必要なとされる挨拶ができるようになった。また、作業中もやり取りが以前と比較してより自然に行えるようになった。振り返りでは、より相応しい言動について本人に伝えることで、生活場面への応用を図るようにした。作業中に口頭で追加指示を出した際には、耳から聞いた記憶だけでは十分ではないことがあったため、メモの取り方について指導し、メモを見て主体的に追加作業が行えるように導いた。

6、考察

本研究は、コミュニケーションに困難を抱える生徒に対してアセスメントを行い、即時的なフィードバックを加えることで、コミュニケーションの改善を図った事例研究である。学校のカリキュラムに従うだけでは、アプローチが難しいコミュニケーションの改善について、視覚記憶と聴覚記憶の両方を使えるようアセスメントを行い、生徒自身が興味を持って主体的に取り組めるよう自立活動（時間における指導）を行った。

本事例研究においては、学校生活全般での課題は残ったものの、簡易作業場面を通じた模擬的な「働く」経験を通して小さな「達成感」を積み重ねることで、活動場面において課題であったコミュニケーションの改善に至ることができたものと考えられる。

以上から、今回の取り組みは、本研究で紹介した事例に限定されることなく、将来「働く」ことを考えている児童生徒にとって有効な指導の取り組みになることと思われる。

7、参考文献

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター（2010）「ワークサンプル幕張版 MWSの活用のために」、（独）高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター